“A Woman Young and Old”における引用の構造

永　田　節　子*

The Construction of Quotations in “A Woman Young and Old”

Setsuko Nagata

Abstract : W. B. Yeats’s “A Woman Young and Old” is composed of quotations from George Herbert’s “The Collar”, John Donne’s “A Nocturnal upon S. Lucies day ; Being the shortest day” and Sophocles’s “Antigone.” The construction of quoting these poems and the drama indicates W. B. Yeats’s intention of composing his work. As this title, “A Woman Young and Old” shows, the conflict between the two totally different things is the theme of the work. He tries to pursue the conflict and to find the solution of the conflict. He is interested in the metaphysical poets and the dramatist because they pick up the theme of the conflict and the order of the universe in their works. He imitates their thoughts about the order and the construction of time and space in their works. He constructs his own time and space to solve the conflict in his work. The difficult situation of Ireland after the independence from Britain is reflected in the theme of the conflict.

Key words：construction　quotation　“A Woman Young and Old”

序　論

“A Woman Young and Old”という連作が書かれたのは1926年から1928年にかけてである。本論で取り上げた作品の創作年代をみてみると“Father and Child”1926–27年、“A First Confession”1927年[1)]、”From the ‘Antigone’”1927年[2)]である。この連作の創作に関わった時期に、イエイツは政治家としてアイルランドにおける多くの論争に関わりあうことになった。この時期というのは1922年にアイルランドがイギリスから独立した後で、国内での内戦が激しく絶え間ないという状況にあった。支配権を握った政府や、カソリックの統治に対して反対の立場にあったイエイツは、アイルランドが混乱の中にあり問題を抱えた状況にあることを憂慮しており、このことは彼の連作“A Woman Young and Old”の創作と関係しているのである。

さて、“A Woman Young and Old”を構成する作品はマクミラン出版社から詩集 *The Winding Stair* として1929年に出版されていた[3)]が、1933年に *The Winding Stair and Other Poems* として出版される際には、詩集の序文にデュラックに宛てた手紙が献辞としてつけられていた[4)]。そのなかで“A Woman Young and Old”という連作を創作した動機に関してイエイツは、「“A Woman Young and Old”という詩は詩集 *The Tower*（1928）を出版する前に書いた作品ではあるが、今では思い出せない何か理由があって、ほうっておいた。」という説明を述べているのである。彼は、当時の政府の政策や、教会によるカソリック教に重点をおくアイルランド支配に対する批判が動機となって、こ

*関西福祉科学大学健康福祉学部　教授

の作品の創作を始めたと考えられる。ところが、イエイツの作品は執筆の動機を大きく超えて、彼独自の肉体と魂、「この世」と「あの世」との関係等、相対立するものの関係を追求するものとなっている。そこで、彼は作品の意味を狭く限定して受け取られないように、しかしながら同時に、この作品を書かざるを得なかった事情についても忘れられないようにと、このような文を書いたと考えられる。

ところで、イエイツは当時の離婚問題についての議論に関して、1925年3月に出版された*The Irish Statesment*に掲載した“An Undelivered Speech”のなかで、当時の政府のコスグレイブを批判している。現政権がカソリック教に重点を置き過ぎる結果生じてくる弊害を取上げ、アイルランドには本来昔からの宗教的なものへの信頼（a religious truce）があったとし、現政権のコスグレイブがそれを潰してしまったと非難している。また、イエイツは愛（Love）のテーマについても、社会制度や国の法への関心とともに取り上げている。更にイエイツはアイルランドのナショナリズムに関して、かつてのようなやり方はもう有害だと語っている。なぜならもう戦いではなにも得られなくて説得が必要であり、そのためには辛抱強くリベラルで近代的な国にならなくてはいけないと述べているのである。このようにイエイツはアイルランドがイギリスから独立して独自の近代国家として成り立っていくためには、独立の為の戦いの後内乱が続く現状に対して、解決のない問題があっても偏見を持たず辛抱強く対話をすることの重要性を語っている[5)]。

このようなイエイツの考え方は、彼の連作“A Woman Young and Old”の創作に関係しているのである。イエイツは当時の混乱するアイルランドにどのように秩序がもたらされるかということをきっかけとして、彼独自の思考を深めようとして“A Woman Young and Old”という連作を創作したのである。彼はこの連作に十七世紀の形而上詩人であるジョージ・ハーバートとジョン・ダンの詩や、ソフォクレスの劇を引用しているのであるが、その引用の構造には共通するものがみられるのである。

そこで本論では、“A Woman Young and Old”という連作を構成する十の作品のなかで“Father and Child,”“A First Confession,”“From the ‘Antigone’”という三つの作品を取り上げて“A Woman Young and Old”に一貫する引用の構造を分析することによって、イエイツがこの連作において彼の抱えるテーマにどのように取り組もうとしたかをたどっていくことにしたい。

“Father and Child”における ジョージ・ハーバートの引用に関して

イエイツはこの連作で、十七世紀形而上詩人がとりあげた手法を参考にして、相対立するものと、その両者の関わりとを追求しようと試みている。この連作の最初の作品 “Father and Child”は、ジョージ・ハーバートの“The Collar”という作品が下敷きとされている。

まず、ハーバートの作品からみることにしよう。“The Collar”という作品は語り手が信仰に縛れている現状を捨てるという決断を語ることからはじまる。ハーバートの作品のタイトルのcollarという言葉は規律、制約、束縛という意味を含んでいるが、この詩において語り手は信仰について自問するのである。

「信仰の束縛に縛られているのがいいのか、そのような束縛を断ち切ってしまうのがいいのかという議論はもうやめよう。冷たい実りのない議論をやめて、束縛から逃れなければならない。」と語り手は考えるのである。そして、「神につかえることをやめて自由に生きるのだ。」という想いに強く駆られた時、突然語り手は神の声を耳にするのである。

But as I rav’d and grew more fierce and wilde
At every word,
Me thought I heard one calling, *Child!*

And I reply'd, *My Lord*.[6)]

“Child”という呼びかけに語り手は”My Lord”と答える。語り手は神の束縛から逃れようとしつつ、最後は神に素直に従うのである。ところで、ハーバートのこの詩はマタイによる福音書と関わりを持っている。

> イエスはこう言われた。「天地の主である父よ、あなたをほめたたえます。－略－疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。－略－わたしのくびきを負い、わたしに学びなさい。そうすればあなたがたは安らぎを得られる。－略－」
> (マタイによる福音書 11 章)

イエイツは、ハーバートの作品におけるこのような信仰にまつわる父と子との関係を、彼の作品ではタイトルはそのままにしておいて父と娘との関係に置き換え、父を社会の規範をあらわすものとし、娘をそのような規範に縛られないものとして描き出している。イエイツの作品における少女の父に対する立場と、ハーバートの詩における、語り手が信仰の道を長年選んできたけれども異教的なものを捨てられず、神による束縛を振り捨てようとする立場とは、父に従おうとしないということにおいては共通する。ただ完全に異なるのは、ハーバートの場合、語り手はこの詩の冒頭では強い口調で信仰の道に進むことを拒否するが、最後に一転して、‘Child’ という呼びかけの声を耳にし、反射的に ‘My Lord’ と返事をすることである。ハーバートの作品のなかで語り手は彼自身のなかで対話、問いかけを深めていくうちに、キリスト教のくびきを負っていくことへの確信を持ち、信仰を確かなものとするのである。イエイツの作品のタイトルが「父と娘」ではなく、「父と子」(“Father and Child”) というタイトルにされているのは、イエイツのこの作品において描かれる状況がハーバートの作品で描かれるような状況と遠くかけ離れていることを浮かび上がらせる効果を持たせる為なのである。イエイツの“Father and Child”を次に引用する。

> She hears me strike the board and say
> That she is under ban
> Of all good men and women,
> Being mentioned with a man
> That has the worst of all bad names ;
> And thereupon replies
> That his hair is beautiful,
> Cold as the March wind his eyes.[7)]

娘は悪い風評のある男のことでテーブルをたたいて激しく怒る父に対して、父の規範に縛られることに抗議するのである。イエイツの作品の場合、父と娘との対話はすれちがったままであり、娘は最後まで父親とは意見が違うという立場のままで終わる。この作品では世間の規範にそった父親の立場は無視されて、娘は相手の髪が美しいとか、目が春の風のように素適であるとか、父とは異なる判断基準から返事をするのであり、対話はすれちがいのまま終わるのである。

“A First Confession”における ジョン・ダンの引用に関して

さて次に、形而上詩人のなかでもジョン・ダンの作品が、イエイツの連作“A Woman Young and Old”の創作にどのような影響を与えたかを考えてみることにしたい。イエイツは 1912 年にジョン・ダンの詩集を編纂して彼に送ったグリアソンにお礼の手紙を書いている。送ってもらった注のおかげで、より一層ダンの詩を理解できるようになったと礼を述べた後、特にダンの詩のイマジネーションに関心を持ったと書いている[8)]。イエイツはダンの作品にみられる小宇宙と大宇宙とのコレスポンダンスに関心を持ち、彼自身も天と地、「この世」と「あの世」

という対立する世界を包括する宇宙観を作りあげようという試みをおこなおうとしたのである。

そこで、イエイツがダンの“A Nocturnal upon S. Lucies day ; Being the shortest day”という作品をどのように捉え、彼自身の“A Woman Young and Old”という作品の創作に取り入れようとしたかを考えることにしたい。まず始めに、イエイツがダンの“A Nocturnal upon S. Lucies day ; Being the shortest day”を参考にして作った作品の一つである“A First Confession”[9]を取りあげるにしたい。

“A First Confession”という作品において、女性は自身の行動は偽りであり、コケットリーに過ぎず、本当に求めているのは truth[10]と喩えられるようなものであると語る。しかしその後すぐにその考えを翻し、そのように魂を重視するのではなく肉体を重視する立場をとることを表明するのである。ところがその後、語り手の女性の立場はどのようになるのか曖昧な表現でこの作品は終わってしまうのである。最終連で、語り手は問題としていた魂と肉体に関して結論のでない立場を、ダンの詩で描かれていた十二宮（Zodiac）[11]を持ち出し、昼と夜と喩えられる対立する世界の境界に語り手の立場をおくことによって結論とするのである。

このように、語り手は魂と肉体、昼と夜という相反する世界を、どのように語り手自身のなかで関係づけるかが問われる状況におかれているのである。この連作のタイトルが“A Woman Young and Old”とされているのも、連作の形式としては若いときから年老いるまでの女の人生を取り上げているかにみせかけつつ、young と old というような相反するものが同時に含まれるものにおける相反するものの関わりを考えるということが作品のテーマとなっているからなのである。

“A First Confession”の中で、魂と肉体との関係においてどちらが優位にたつかという議論がおこなわれているのであるが、その議論が二転、三転と変化し続けるように作られていて、魂と肉体との関係においてどちらの立場が優位となるかが明らかとならないような議論の展開がなされる。語り手は相反する世界のどちらにも同じ割合で属していて、たえずその両方の世界の間で揺れて行き来することになるので、語り手は二つの世界の境界上に存在する状況として描かれることになる。イエイツは、相反する世界のこのような境界上におかれた語り手の状況を作品の時間・空間として反映させようとして、ダンの“A Nocturnal upon S. Lucies day ; Being the shortest day”という作品にみられる手法を彼自身の創作においても取り入れているのである。イエイツがこの連作においてハーバート、ダン、ソフォクレスを引用した意図は共通しており、相反するものの対立を作品の時間・空間として描き出すことにある。そして彼は地上の世界の混沌と秩序を、形而上詩人の小宇宙と大宇宙のように宇宙の体系のなかで捉え、秩序を求めて新しい体系を作り上げようという試みをおこなうのである。イエイツが彼の詩において相反する世界として、昼と夜、「この世」と「あの世」、そしてその相反する世界における境界という描き方をするのは、ダンの“A Nocturnal upon S. Lucies day ; Being the shortest day”という作品における時間・空間を踏襲したのである。そこで次に、ダンの“A Nocturnal upon S. Lucies day ; Being the shortest day”をみておくことにしたい。この作品は詩のタイトルの副題として一番昼の短い日と名づけられているように、冬至であり聖ルチアに祈りを捧げる日であることが強調されているのである[12]。この作品において、冬至の太陽が闇に消えるその瞬間、昼と夜の境界、生と死との世界の境界という時間と空間が描かれるのである。

さて、“A Nocturnal upon S. Lucies day ; Being the shortest day”において、死後の世界で想いを寄せる女との出会いを願って死んでいく男が、錬金術により死というプロセスを経て変容を遂げることが語られる。

Study me then, you who shall lovers bee
At the next world, that is, at the next Spring :
For I am every dead thing,
In whom love wrought new Alchimie.
For his art did expresse
A quintessence even from nothingness :
From dull privations, and leane emptinesse :
He ruin'd mee, and I am re-begot
Of absence, darkness, death ; things which are not.[13)]

この詩句にみられるように、愛（Love）に苦しんだ語り手は死後、錬金術が作用したようにこの世には存在しない第五元素[14)]とよばれるものへと変容することになる。イエイツがダンのこの作品に着目したのは、愛（Love）と関わりを持つものが死というプロセスを経て錬金術によると同様の変容を遂げ、そしてその結果生まれてきたものが地上世界での関係を変えることを可能にし、相反するものの対立に新しい関係を作り上げる可能性を持つということ、あるいはそのような可能性を持つ力が生み出されることである。イエイツはこのように相反するものが対立する関係において、愛（Love）が関わりを持って関係を変える力を持った新しいものが生みだされるという作品の構造に関心を持ち、同様の構造を作り上げる試みとして、連作の最後の作品“From the ‘Antigone’”の創作にあたっているのである。

“From the ‘Antigone’”における ソフォクレスの引用に関して

イエイツは、ダンの“A Nocturnal upon S. Lucies day ; Being the shortest day”において語り手が愛する女性の死を嘆き、12 月 13 日、聖ルチアの日における祈りのなかでその女性に寄せる想いを捧げるという形式を土台として、ダン独自の世界を作り上げる手法にも関心を持ち、彼の“From the ‘Antigone’”という作品にソフォクレスの ‘Antigone’ を引用する場合に、事態を見守る人々の感情をうたいあげるコロスの役割に着目するのである。イエイツは、コロスがアンティゴネーの死を嘆き、混沌に秩序をもたらす可能性を持つもの、相対立するものの関係を新しくさせるものが生み出されることを祈りのなかで待っている状況を彼独自の時間・空間として描き出そうとするのである。

ソフォクレスのアンティゴネーは、兄を埋葬してはならないというこの世の法に背き、あの世での法に従って兄の埋葬を行い自身の死を選ぶのである。アンティゴネーを追って婚約者も自害し、彼女の愛はこの世では成就しないものの、あの世での法に沿って生き、死して生きるという選択を彼女はすることになるのである。ソフォクレスの ‘Antigone’ という作品において、アンティゴネーは「この世よりもずっと長く続くあの世における法にそって生きる。」[15)]という決意を語る。このようなソフォクレスの原作におけるこの世とあの世というテーマは、イエイツの“From the ‘Antigone’”の創作に引き継がれるのである。

イエイツは“From the ‘Antigone’”において、この世とあの世という相反する世界における境界上にアンティゴネーがおかれるという状況を Oedipus'child / Descends into the loveless dust.[16)]という詩句に象徴して表現し、生と死の境界という瞬間を浮き彫りにするのである。「オイディプスの子供であるアンティゴネーが今まさに生きながら砂のなかに埋もれていく。」という詩句は、原作とは異なるイエイツ独自のものであり、この詩句はアンティゴネーがこの世で死してあの世で生きるというような生と死の境界がない状況をイエイツが象徴的に表現しようとしたものである。Loveless という言葉が使われているのは、アンティゴネーは花嫁となるはずだったけれども、その愛もかなわずに死んでいくからなのであり、イエイツはこの作品においても、Love というテーマを取り上げた連作としての一貫性を作り上げようとしているのである。

イエイツの“From the ‘Antigone’”は、この世の法とあの世の法という相対立する世界において、兄を愛するが故の死というプロセスを経る事により、その異なる二つの世界をつなぐ可能性を秘めた要素を持つものが生みだされることが待たれている状況を描き出すのである。イエイツが彼の“From the ‘Antigone’”という作品をコロスの詩句だけで構成したのは、人々が嘆きと祈りのなかで、混沌の中から新しい秩序をもたらす力を持つ何かが生まれてくるのを待つという状況を作り上げようと試みたからなのである。イエイツは混沌と破壊のなかから新しい秩序を作り上げる力を持ったものが産みだされることを嘆きと祈りのなかで待つという状況を、テーバイの街とアイルランドとを重ねあわせて描き出そうとしたのである。

そして更に、イエイツは混沌と秩序というテーマを地上世界と天上世界とを重ね合わせて描くのである。この作品において、コーラスの詩句（Overcome Gods upon Parnassus ; / Overcome The Empyreran ; hurl / Heaven and Earth out of their places, ）[17]は、天と地の秩序が崩壊し新しい宇宙の秩序を作り上げることができるような強い力が働くことを、そして宇宙を構成する天と地に、宇宙規模で秩序の変化がおこることが期待されていることを描きだそうとするのである。連作“A Woman Young and Old”において、イエイツはソフォクレスの作品を引用する際にも形而上詩人の作品を引用する場合と同様に、地上世界の混沌と秩序を天上世界も含めた宇宙規模のものとして取り扱おうとするのであり、天と地、この世とあの世に新しい関係を作り上げて、新しい秩序を生み出すことの出来る力を作り上げようという試みをおこなうのである。

イエイツのこのような創作意図は、詩句の配列の試みにもあらわれている。もともとは abab という四行連の形式に則ってこの詩を構成していたものを、パウンドの助言に従い[18]八行目にあった文を二行目に挿入するのである。イエイツはこのようにあえて作品の秩序ある構成を壊すことによって、混沌の中から新しい秩序が生まれる可能性を探る試みをおこなうのである。このような詩句の配置は、相対立する問題の解決がつかない状況に対して、それに打ち勝つ、あるいはその対立を打ち破る強い力を求めるという作品のテーマを投影しているのである。

“From the ‘Antigone’”という作品が *The Winding Stair and Other Poems* という詩集の最後に置かれているのは、この作品が「相反するものの関係において新しい関係を作り上げる可能性」を取り上げ、混沌の中から秩序が生み出されることを祈る作品だからであり、作者が創作において今後向かうべき方向性を示しているからである。この詩の後に続く詩集 *A Full Moon in March*（1935）のはじめが、パーネルの死のアイルランドにおける意味を問いかけた作品である“Parnell’s Funeral”から始まることになるのであり、テーバイの街の混沌はアイルランドという国の混沌と重ねあわされたまま、混沌と秩序のテーマは次の詩集に引き継がれるという構成となっているのである。

“From the ‘Antigone’”に秘められた密かな試み

ところで、以上みてきたように、相対立する世界の関係を解決する可能性のあるものをもたらすものの追求が“From the ‘Antigone’”という作品において行なわれているのであるが、詩集の最後であるこの作品においては新たな試みもおこなわれているのである。イエイツは相対立する関係に新しい関係を作り上げるものが生まれてくるという構成をとるこの作品において、生まれてくる新しいものがどのような方向性を持ったものであるのが望ましいかということを密かに限定させる工夫も試みているのである。

このようなイエイツの意図はソフォクレスの原作を自身の創作に引用する際に、彼が参考にした原作の三通りの翻訳にはない bitter sweet-

ness という言葉[19]をこの作品に持ち込むことにもみられるのである。そもそも bitter sweetness という言葉は、この連作のなかの“Her Vision in the Wood”という作品においてつかわれていたものである。“Her Vision in the Wood”では bitter sweetness という言葉は Love にまつわる愛と憎しみの対立した感情を含むものとして扱われていたのである。また“Her Vision in the Wood”において、ビジョンという言葉は語り手が目にしたと思ったものは単なる幻にすぎなかったという意味でつかわれており、“Her Vision in the Wood”という作品は対立するものを解決することのできるビジョンというものを描き出すことはできなかったのである。

ところが、連作の最後に、ソフォクレスの原作において「人々を憎しみあわせる為に生まれてきたのではなく、互いに愛しあわせる為に生まれてきた。」[20]と語り、愛を貫いて死ぬアンティゴネーを引用することにより、独立後の内戦にくれるアイルランドにおける対立や憎しみに新しいビジョンがもたらされることへの願いが込められることになる。そして、“From the ‘Antigone’”においてイエイツは bitter sweetness という言葉に、相対立するものの関係において新しいビジョンをもたらす可能性、つまり新しい歴史をもたらすものが生み出されるという可能性を暗示させるという役割を密かに担わせようとするのであるが、その試みは曖昧さを残しているのである[21]。詩集の結末で新しいビジョンが生まれる可能性を暗示するという手法は、詩集 *Responsibilities* の終わりで“The Magi”と“The Dolls”という作品によって詩集として向かうべき方向性を暗示する手法[22]と同じなのである。詩集 *The Winding Stair and Other Poems*（1933）においても、詩集の最後に配置された“From the ‘Antigone’”という作品における bitter sweetness という言葉は、この詩集が今後向かっていくべき方向性を、予兆のように暗示しようとする作者の意図が込められているのである。

参考文献

1）A. Norman Jeffares, *A Commentary on the Collected Poems of W. B. Yeats*（London : The Macmillan Press Ltd., 1968），pp. 392–93.

2）David R. Clark, *Yeats at Songs and Choruses*（Amherst : The University of Massachusetts Press, 1983）p. 211.

3）A. Norman Jeffares, *A Commentary on the Collected Poems of W. B. Yeats*. p. 398.

4）W. B. Yeats, *The Collected Poems of W. B. Yeats*（London : Macmillan London Ltd., 1933）p. 536.

5）Ed., John P. Frayne and Colton Johnson, *Uncollected Prose by W. B. Yeats 2 : Reviews, Articles and Other Miscellaneous Prose 1897–1939*.（New York : Columbia University Press 1975）pp. 449–52.

6）Ed., Helen Gardner, *The Metaphysical Poets*（Harmondsworth : Pengin Books Ltd., 1957）p. 135.

7）W. B. Yeats, *The Collected Poems of W. B. Yeats* p. 308.

8）Ed., Julian Lovelock, *Donne : Songs and Sonets*（London : The Macmillan Press Ltd., 1973）p. 99.

9）Ed., Daniel Albright, *W. B. Yeats : The Poems*（London : J. M. Dent and Sons Ltd., 1990）p. 746.

10）この詩における truth というのは“An Undelivered Speech”のなかでイエイツの述べているようなアイルランドに古来から存在した宗教的なものに相当すると考えられる。Ed., John P. Frayne and Colton Johnson, *Uncollected Prose by W. B. Yeats 2 : Reviews, Articles and Other Miscellaneous Prose 1897–1939*. p. 449.

11）黄道帯。地球を中心にみて太陽が天球上を通る大円。この帯状をなす大円軌道には 12 の星座が属し、それらを占星学では黄道十二宮と呼ぶ。

鈴木　弘　図説イエイツ辞典（東京：本の友社　1994）244 頁。

12）St Lucy’s Day（聖ルチアの日）は Julian 暦では 12 月 13 日で、1742 年までこの日は冬至に相当し一年中で最も日の短い日とされた。

Ed., Theodore Redpath, *The Songs and Sonets of John Donne*（Cambridge : Methuen and Co. Ltd., 1956）p. 71.

13）John T. Shawcross, *The Complete Poetry of John Donne*（New York : Doubleday and Company, Inc., 1967）p. 155–56.

14）ダンの詩において第五元素というのは、地上のものから錬金術によって取り出された成分で、地上世界にはない成分と化したもの。
Ed., Theodore Redpath, *The Songs and Sonnets of John Donne* p. 73.

15）Ed., William Arrowsmith, *The Greek Tragedy in New Translations–Sophocles : Antigone*－(Oxford : Oxford University Press, 1973）p. 39.

16）W. B. Yeats, *The Collected Poems of W. B. Yeats* p. 315.

17）Ibid., p. 327.

18）Ed., Daniel Albright, *W. B. Yeats : The Poems* p. 740.

19）David R. Clark, *Yeats at Songs and Choruses* p. 217.

20）Ed., William Arrowsmith, *The Greek Tragedy in New Translations–Sophocles : Antigone–* p. 42.

21）*Responsibilities* という詩集の終わりに“The Magi”という作品が配置されていたように、詩集 *The Winding Stair and Other Poems* の最後におかれた“From the ‘Antigone’”という作品もマギーという存在と密かにではあるが、関係を持たされているのである。“The Adoration of the Magi”において、三人の老人がみつけたのはマリアとキリストではなくて、ユニコーンに似た存在を産んで今死につつある女である。この作品においてその女が“Harsh sweetness”, “Dear bitterness”, “O solitude”, “O terror”と奇妙な呼びかけをし、つぶやくのである。[W. B. Yeats, *Mythologies*（New York, A Division of Macmillan Publishing Co., Inc 1959）p. 314. 参照]

このように sweetness や bitterness という言葉は“The Adoration of the Magi”においてそれぞれ呼びかけとして使われている言葉であるが、“From the ‘Antigone’”という作品では biter sweetness という一つの言葉として呼びかけにつかわれることになる。イエイツはこの言葉をつかうことによって愛のテーマを連作において一貫させる目的の為だけではなく、キリストの時代とは異なる歴史を作り上げる可能性を持った存在、混沌の中に新しい秩序をもたらす可能性をもつものが生み出されるかもしれないということを予兆のように暗示的に描き出そうと密かに試みようとしたのである。

22）「‘The Magi’ と ‘The Dolls’ における新しい創作の方向性」永田節子　関西福祉科学大学紀要第 8 号（大阪：関西福祉科学大学出版　平成 17 年）99～106 頁。